

# 「移動する子ども」という記憶と温又柔

早稲田大学 川上 郁雄

## はじめに

20世紀後半の最大の特徴のひとつは大量人口移動であった。国境を超える移民・難民から観光やビジネス、研修、留学などで移動する人まで、移動は普通の出来事となった。その結果、人々の言語使用は以前より増して複雑になった。一人の人間が複数の言語を使用して生活することは当たり前となり、多様な言語能力を発揮してコミュニケーションすることが日常化している。その傾向は二一世紀に入り、ますます顕著になってきている。

人々の複数言語使用の実態は、人と言語と社会の関係を研究する社会言語学の研究動向にも影響を与えている。その動向について、社会言語学者の三宅和子は次のようにいう。従来の社会言語学の研究対象は、日本においては「方言を含む言語変種の研究や敬語などの対人関係の言語行動研究」などが活発であり、海外においては移民の流入や国境の崩壊、統合などによる「言語選択、言語維持と消滅、ピジン・クレオール、複数言語併用などの言語研究」が行われてきた。しかし、近年では‘Superdiversity’（超多様化社会）と呼ばれるポスト構造主義時代の言語状況が生まれてきているため、社会言語学に新しい潮流が現れてきているという（三宅、2016）。端的に言えば、言語を静的かつ固定的なものとして捉えるのではなく、流動化する社会状況の中で動態性や複雑性のあるものとして捉えるという言語研究のパラダイム・シフトの必要性が主張されるようになったのだ。その結果、「従来の Bilingualism や Multilingualism 研究の言語の見方（モノリンガルを基準としての二言語や複数言語を考察する立場）に対しても、批判的な姿勢」が強まっているという。

その上で、三宅は、社会言語学に見られるパラダイム・シフトは、アイデンティティをめぐる問題にも関与していくとして、次のように指摘する。

「新たなパラダイムでは、アイデンティティはダイナミックで文脈依存的なものとして捉えられ、固定的なものではなく、行動や実践やコミュニケーションの中で形作られていくものとして扱われる。アイデンティティは交渉

可能であり、人生を通じて形作られ変容していくものであるという考えは、グローバル化の中で多くの人々が国境を越え移動し、帰属する社会や国が固定されない状況が拡大するにつれ、次第に説得力を増してきている。」(三宅、2016)

では、言語の動態性や複雑性がどのようにアイデンティティをめぐる問題に関与しているのか。近年の社会言語学では、Metrolingualism、生態学的な Spatial repertoire (Pennycook, & Otsuji, 2015, 尾辻, 2016) や Translanguaging (Garcia & Li Wei, 2014) など、相手や場面や目的などの中で相互影響され使用されるプロセスとしての「ことば」の実態(以下、ことばと表記)が指摘されている。つまり、個別言語が language として存在しているという捉え方ではなく、動的、相互作用、複合的なもの (languaging) としてことばを捉えることによって、人と人とのコミュニケーションのあり様を理解しようという考え方である。そのような意味で、「流動的なプロセスこそ、ことばの本質」であり、「ことばにおける移動」は常に起こっていると見ることができる。

また人々の複数言語使用の実態について、欧州で盛んに議論されている複言語複文化主義の考え方も、ことばとアイデンティティを考える上で重要な視点を提供する。これは社会の中に複数の言語文化が並存すると考える多言語多文化主義と異なり、個人の中の複数性を捉える考え方である。たとえば、欧州評議会の委託研究で、コスト他(2011)は、「現代に生きる人々は誰もが幼少期より言語と文化の複数性と融合性に日常的に触れる経験を積んでいる。」「その経験がベースとなった複言語複文化能力は複雑で不均質だが全体としてひとつのものとなって人を形づくっている。」と述べる。つまり、一人の人間のもつ複言語複文化能力から他者との間に生じる多様なことばが人の生き方やアイデンティティを形成するという考え方である。このような意味で、現代を生きる人々の「複合的で、動的で不均質が常態という視点」に立ってことばやアイデンティティを捉えることが重要であるといえよう。

ただし、本稿で注目するのは、従来の社会言語学のいう複数言語による code-mixing や code-switching、あるいは一人の人の複言語複文化状況の実態を分析記述することではない。むしろ、複数言語環境で育っていく人の複数言語使用や自らの複言語複文化状況に関わる心情面に注目する。その理由は以下の三点による。第一は環境である。自らの複数言語環境は自らが生み出した環境ではなく、他者(家族や学校制度など)によって生み出された環境であり、一人の力では変えることが難しい。第二は他者との関係性である。ことばは他者とのやりとりで

あり、常に他者のまなざしとそれに対応する自らの社会認識、さらに自らへの内省がともなう状況が必然的に発生する。複数言語でやりとりすればそれだけ関係性が多様になり複合的にならざるを得ない。第三は位置どりである。社会のもつ社会的文化的規範や国籍等のアイデンティフィケーションと常に向き合うことを通じて、自分の位置どりを探究せざるを得ない。アイデンティティは他者からの名付けと自らの名乗りの間で弁証法的に成立するからである（川上編、2010）。これらの三点は複数言語環境で成長する人の心情に大きく、かつ複雑に、また深く影響し、その人を形づけていくと考えられる。したがって、複数言語環境で育っていく人を理解し、アカデミックなテーマとして議論するためには、複数言語使用の実態把握だけではなく、そこに生きる人の複数言語使用や自らの複言語複文化状況に関わる「感情」「感覚」「情念」の世界に深く分け入ることが不可欠なのである。

本稿は、これらの問題意識から、事例研究として、作家の温又柔さんの作品を取り上げる。作品の分析を通じて、複数言語環境で成長する人の心情とアイデンティティ形成について考察する。最後に、「移動する子ども」という概念を提示し、今後の展望を提示する。

## 1. 温又柔の自己エスノグラフィー：『台湾生まれ 日本語育ち』

温又柔（おんゆうじゅう、Wen Yuju）さんは、台湾人の両親のもと、1980年に台湾・台北で生まれ、3歳のとき家族とともに日本にやってきた。温さんは女性で、小説家、エッセイスト、詩人でもある。2006年、法政大学大学院・国際文化専攻修士課程修了。2009年、小説「好去好来歌」ですばる文学賞佳作を受賞。2011年、『来福の家』（集英社）を刊行。またエッセイをまとめた『台湾生まれ 日本語育ち』（2015年、白水社）で、2016年日本エッセイスト・クラブ賞を受賞した。さらに、小説「真ん中の子どもたち」で2017年上期の芥川賞候補作品としてノミネートされた。

彼女のエッセイ集や小説はどれも本稿のテーマと密接に関係するが、ここでは、まず自伝的エッセイである『台湾生まれ 日本語育ち』を取り上げる。この本の帯に「我住在日語：わたしは日本語に住んでいます。」とあるように、この本は、幼少期より複数言語環境で成長した子どもである温さんが自らの心情を生き生きと描いている点に特徴がある。その意味で、当事者による貴重な語りの書であり、学術的に稀有な価値のある書といえる。以下に、温さんの幼少期からの当事者としての語りをみてみよう。なお、以下のかっこつきの引用はすべて本書からであ

る。掲載ページ数は省略する。

### 1.1 幼少期の移動とことば

温さんは幼少期、台湾語混じりの中国語を話す両親のもとで育つ。

「はじめて喋ることを覚えた頃、わたしは台湾にいた。」

「一チマァ、ワ・アイ・チャー、餅乾！」

（今、わたしは、ビスケットが食べたいの！）

コトバに中国語と台湾語がまざるのは、幼いわたしに話し掛ける大人たちが、皆、そんなふう喋っていたからだ。」

「けれども喋ることを覚えたばかりのわたしは、（中略）聞こえてくるコトバの、どこからが中国語でどこまでが台湾語なのか区別しない。台湾語かと思えば中国語。中国語かと思えば台湾語。大人たちが状況に応じて使い分ける話し方を聞こえたとおりに、ただ真似していた。」

温さんは、この頃の自身の言葉は「台湾語混じりの中国語」であったという。周りの大人たちの会話を聞き、言葉を覚えていくのが得意で、「口達者でうるさいわたし」だった。温さんは、台湾の、このような言語環境で幼少期を過ごしたのち、3歳になって、家族とともに東京へ移動する。東京で暮らすときも、家庭では両親の「台湾語混じりの中国語」で育った温さんは、5歳になって幼稚園に行くことになること、

「うちの外（＝幼稚園）で鳴り響いているコトバは、それまでずっと馴染みのあったコトバとは全然異なる響きを持つもの」

であることに気づいていく。

「わたしは五歳の年の春、自分の中で定着しつつあった中国語（＋台湾語）とはまったく異なる、日本語という新しいコトバの中に投げ込まれたのです。お喋りだったわたしは、すっかり無口になりました。」

そのような温さんに、両親はテレビで『ドラえもん』など日本のアニメ番組を見せ、日本語を吹き込む。そうすると、

「半年も経つと、ドラえもんとのび太がしているような会話を、幼稚園の友だちとするようになりました。友だちとの会話に慣れてくると、アニメの中のものび太たちの会話をもっと理解できるようになりました。こんなふうにしてわたしは、音としての日本語をぐんぐん吸収していきました。」

この頃、温さんが考えていたエピソードも秀逸である。

「一ゴメンネは自分よりも小さい子、ゴメンは自分と同じ歳の子、ゴメンナサイは先生にむかって言うもの」

「中国語では「對不起」と言えば済むところを、日本語では相手によって「ごめんね、ごめん、ごめんなさい」と使い分けなければならない—わたしは、おかげさなえば、日本語のルールというか、秩序といったようなものを会得しつつあったのです。」

小学校へ入る前の幼少期の子どもは、一般に認知発達の初期段階にあるため、言語を客観的に認識することが難しいといわれるが、温さんは自分のことば、そして相手のことばについて子どもながらに「考察」していたということは、複数言語環境で成長する子どもの認知発達を考えるうえで注目される貴重な事例だ。

小学校に入学すると温さんは日本語をますます習得していく。特に、書くことに関する記述が興味深い。

「小学一年生のときの「あのね帳」を捲ると、こんなふうにある。—わたしは、きょう、本を、かいました。あと、コーラを、かいました。いもうとと、のみました。おわり。

読点だらけのわたしの作文に「とてもたのしいじかんだったんだね」と赤いサインペンで寄り添う文字には優しさが滲んでいる。」

と担任だったK先生からの「お返事」が嬉しくて、書くことに夢中になっていったという。さらに、

「わたし自身は、書くことがただもう楽しかった。そして、文字とは、日本語をあらわすためのものだと信じ込んだ。たとえば、「還在睡覺！キンキャイ」という母のコトバを、誰に言われるでもなく、「まだねてるの、はやくおきて！」と頭の中で置き換える。まるで「翻訳家」のように、母の放つ中国語や台湾語を日本語に「整えて」から、「書く」のだ。おかげで、わたしの文にあらわれる母は、本物の母よりずっと日本語が流暢だった。」

その後、温さんはますます日本語が上達していく。

「いつしかわたしは、家族といるときも日本語だけで喋るようになっていた。両親から話しかけられるコトバはみんな聞き取れるのだけれど、自分のほうから中国語や台湾語を話す機会はぐっと減った。」

## 1.2 ことばについての思い：中国語、台湾語、日本語

子どもの頃の（そして、今もそのようだが）温さんの母親の言葉は、中国語と台湾語と日本語の混ざる「ママ語」だと温さんは言う。「ママ語」とは以下のような喋り方である。

「ティアー・リン・レ・講話、キリクァラキリクァラ、ママ、食べれないお菓子。

あいもかわらず母の単語と単語の繋ぎ方が「適当」きわまりない。日本語としてはもちろん、中国語としても台湾語としても「非文」というやつである。」温さんは大人になってから母親の言葉について愛情をもって受け入れられるようになるのであるが、まだ子どもであった頃は、母親よりも日本語能力が高くなった温さんは「ママ語」に対して厳しい見方であったようだ。

「おそらく、中国語や台湾語を次から次へと日本語に置き替えるようになった七歳の頃、きまじめな「翻訳家」がわたしの中で生まれてから、その思い込みは始まった。「書く」ことを覚えて以来、わたしは自分の周囲で飛び交う音という音を、「書く」に値するか否か、さながら「検閲官」のように、判断を下すようになった。日本語でない部分—わたしの場合、主に中国語と台湾語—は、「和訳」にするか、そうでなければ、「雑音」とみなして、なかったことにする・・・わたしの中の「検閲官」は、何よりもまず、母のコトバを切り捨ててしまう。」

つまり、温さんは小学校の頃、日本語だけのモノリಂಗナルな世界へ強く傾斜していったと考えられる。そして、温さんは13歳のときから日記を手放せなくなったという。

「自分が過ごした一日を反復する。「書く」という行為をとおして、わたしは、確かに自分のものであるはずの経験や感情を、より自分のものとして刻み付けていく。当時のわたしの日記に最も頻出した言葉は、「わたし」だ。台湾で育てていたなら、わたしの日記に溢れていたのは、「わたし」ではなく、「我 (wo)」だったはず。しかし、「わたし」と心地よく書き連ねる十四歳や十九歳や二十一歳のわたしは、「我」だらけの自分の日記を想像もしない。」

前述のように、温さんは「台湾語混じりの中国語」を聞いて育った。では、日本語以外の台湾語や中国語に対して、温さんはどのように思っているのか。温さんは高校で中国語を学んだ。そのとき温さんは、

「自分が、台湾の中国語ではなく中国の中国語を学習している。高校生の頃は、そのことがあまり気にならなかった。同じ中国語じゃないか、と思っていた。

その違いが肌身に迫るようになったのは、大学に入ってからだ。」

温さんは、大学に入り、さらに中国語学習を継続する。しかし、大学の中国語の授業で温さんは日本人の教員から、温さんの中国語は台湾の中国語であって、「ふつう」の中国語ではないと訂正される。そのときの様子を、温さんは次のようにいう。

「わたしは呆然とした。「ふつう」？ わたしは昔から、その言い方を「ふつう」につかってきたというのに！ わたしは、初めて苦痛を感じた。

—大学生になったらもっとがんばって中国語がべらべらになろう。

実際は逆だった。大学生になったわたしは、次第に中国語を喋ることに對して身構えるようになっていた。」

温さんは中国語の言い方だけではなく、発音にも自信を失っていく。授業で教えられる北京語と比べ、温さんの中国語には「南方の訛りがある」と思うようになった。

「十九歳のわたしは、ただ打ちのめされていた。

(わたしの中国語はふつうではない?)

自分の言葉は「ふつう」ではないかもしれない。いびつななつかしさがこみあげてくる。

「幼稚園」のことを「ガッコウ」と言って相手に理解されなかったこと、「今度」と言うつもりで「ミライ」と言って周囲に通じなかったこと……。幼稚園の砂場で、どの日本語なら口にしてもいいのか混乱していた五歳のときと同じように、十九歳のわたしは大学の中国語の授業で、どの中国語なら「正しい」のだろうかと思っていたのである。」

実は、温さんは小学校3年生のときに家族と一緒に台湾に帰省したことがあった。そのころの温さんはひらがなやカタカナを完璧に身につけ、漢字も増えつつあり、日本語が自分の中の中心に「居座る」状態だった。台湾で、いとこたちと遊んでいるときのことだった。

「いとこたちと遊んでいたら、わたしだけうまく舌が廻らないのだ。中国語しか話さないいとこたちは、いつもの調子で、ぼんぼんとやりとりしている。目の前で交わされる彼らの会話は、ちゃんと理解できた。ただ即座には反応ができない。日本語が先に浮かんできて、言いたいことがすぐには中国語にならないのだ。小さかった頃と比べて、台湾でのわたしの口数はぐんと少なくなった。」

そんなとき、遊んでいた従妹の友だちが温さんを不思議そうに見てから言った。

「中国語、この子わかってんの?」

それを聞いた温さんは、

「わたしは動揺した。昔は、年上のいとこを言い負かすほどじょうずに中国語が話せたのに。

そんなことを、しかも年下の女の子に言われてしまうなんて。屈辱感がふつふつとこみあげてくる。

(あなたの言ってることぐらい、あたしは全部聞き取れるんだから!)

けれども、とっさにそれを中国語で組み立てることができない。わたしは、従

妹の友だちを無言で見つめるしかなかった。」

幼少期の温さんは、中国語、台湾語を使って、いとこたちと遊んでいた。それが小学校3年生で、中国語よりも日本語が先に頭に浮かぶようになり、さらに、大学生になった温さんが台湾に帰省し、いとこたちと会うと、

「年上のいとこたちと向き合うとき、「退化」してしまった中国語を使うことが、余計にせつなく思えた。彼らは皆、中国語や台湾語でべらべら喋っていた頃のわたしを覚えているはずなのだから。」

一方、日本語についての思いも、変化していく。23歳のとき、突然、日本語の日記が書けなくなったという。その理由を、温さんは次のようにいう。

「十年以上、ほぼ毎日、あたかも「生まれながらの自分の言葉」であるかのように、自由自在に操っていた日本語が、ふと「外国語」のように感じられた。いや、逆だ。何故「外国人」であるはずの自分は、すらすらと日本語を書いているのだろう、と思ったのだ。その日を境にわたしは、日本人のふりをしながら、日本語を書くことができなくなった。「書く」ことに限定すれば、それは、その言語は、わたしにとって、たった一つの、自在に操ることが可能な言語である。けれども、日本語が、日本語だけが、わたしの言語なのだろうか？ たたとえば、わたし、をあらわすのは、わたしの場合、日本語だけで本当に可能なのか？」（下線部、本書では傍点。以下同じ）

### 1.3 ことばとアイデンティティ

温さんは、これまで中国語、台湾語、日本語を使いながら、さまざまな場面で、自分のアイデンティティについて考えてきた。たとえば、「台湾総統選挙」のときに、温さんは台湾へ行き、考える。

「台湾に住んでいないわたしが、中華民国籍所持者というだけで台湾の総統を選ぶ権利を持っているのは、本当に「正しい」ことなのだろうか、と。」

また、温さんは、都内の小中学校で中国語圏から来た子どもに日本語支援をする先生をしたことがあった。そのとき中国語を話す子どもから「おんせんせいの中国語はじょうずじゃない」と言われ、「わたしは中国語をがんばるから、あなたも日本語をがんばって」と返事をしたそうだ。「子どもたちは自分より子どもっぽいわたしの中国語を面白いがる」。

一方で、そんな子どもの中に、いわゆる中国帰国者の孫がいた。血統的には日本人に近い子どもが中国語を話し、血統的には台湾人なのに日本人に近い温さんは、

「日本人とは、だれのことのなのか？ 日本語はだれのものなのか？」

と問いかける。

温さんは「日本語は日本人だけのものなのだと錯覚してもおかしくない状況」の中で、自分のニホンゴを模索する日々を送る。そして、自分を「日本語を書く新しい台湾人だ。」と捉えるようになる。

しかし、「日本語＝国語＝日本人」という呪縛から逃れられない。そのとき、温さんは次のように思う。

「いつも身近にあった中国語と台湾語の響きを自分の文章の中に織り込もうと決めたとき、ようやくわたしのニホンゴは「国語」の呪縛から解き放たれたのだと思う。」

そして温さんは決意する。「わたしは、日本語を書く新しい台湾人だ。」そして、温さんはさらに思う。

「自分がこれから書き継ぐニホンゴには、わたしにつらなるまでの台湾人たちの「母語」が織り込まれていくと確信している。

一ワ・エ・ツウ・シ・リップンウエ。

（わたしは日本語に住んでいます）

記憶に向かって、わたしは耳を傾ける。もう二度と、聴こえないふりをしない。わたしの住処には、ずっと昔、日本がやってくるよりももっと前から台湾で奏でられてきた言語も鳴っている。」

温さんの曾祖父母の世代は福建省南部で話されていた台湾語を使用していたが、祖父母の世代で1910年代に台湾で生まれた人々は日本の統治下で日本語による教育を受けた。しかし蒋介石率いる国民党政府が台北に中華民国の臨時政府を置いたときから、中国語が「國語」となり、温さんの父母の世代はその中国語で教育を受けた。温さんは、そのような母について、次のエピソードを語る。

「一國語、しゃべらないと、先生ぶつ

母は、ぶつ、の代わりに、パーと言うときもあったし、打（da）と言ったこともあった。

パーは台湾語、打（da）は中国語。だから母は少なくとも三回はわたしにその話をきかせたことになる。」

中華民国の国民教育として「國語」となる中国語が叩き込まれたのだ。

「その事実を意識すればするほど、わたしは中国語を自分のもう一つの「母国語」というのをためらう。国家によって鞭打たれながら習得せざるを得なかった言語を、人は「母国語」と呼べるだろうか？」

と温さんはいふ。「移動する家族」（川上、2014）には、ことばに家族の歴史が重なるのだ。

#### 1.4 記憶と生き方

温さんの著書『台湾生まれ 日本語育ち』(2015)は、本稿のテーマ、複数言語環境で成長する人の研究において、どのような意味があるかについて考えてみたい。

第一は、本書で詳細に記述されている温さんの思い出やそれにまつわる感情や考えには、幼少期より複数言語環境で成長し、言語間、空間、言語教育カテゴリー間を移動した子どもにとって重要な意味のある記憶が刻まれているという点である。自分の過去の体験や思い出、そのときの感情や思いを、後から振り返って考え、自分の中に「意味ある経験」として記憶に残していく作業が本書の全体に流れている。

第二は、その幼少期より複数言語環境で成長したという体験への意味づけが成長過程で変化していくという点である。さらに言えば、それは家庭だけではなく、社会的な文脈において、たとえば、学校、中国語（北京語）学習、台湾訪問などの社会的な場面で、温さんの年齢や考え方に応じて変化していくという点である。その典型が、「ママ語」への考えや、自分の中国語や台湾語への省察である。つまり、言語間、空間、言語教育カテゴリー間を移動したという記憶には、動態性があるということである。

第三は、温さん自身がことばを複合的なものとして捉えている点である。人格心理学でいう、幼少期の言語によって形成される「言語自己感」(大山、2015)が成長にともなって、変容していくように、温さん自身がことばの捉え方が変化していく。「ママ語」に対する温さんの気持ちの変化も、その例である。母親のコトバは常に、中国語、台湾語、日本語が混ざっているという。日本語以外は雑音とみなしていた温さんは、「今では、母や祖母のコトバを雑音とみなすのではなく、むしろ、ほかでもない自分の日本語の一部として織り込むことを楽しんでいる。」と述べる。本書には、母親の発言が随所に出てくるが、ところどころに、「実際は、中国語、台湾語、日本語が入り乱れていますが、便宜上、日本語に統一しています」と注を入れている。

さらに、温さん自身、カタカナや漢字を織り交ぜた文章を書く。

「カタカナやピンイン、そして簡体字や繁体字といった中国語の漢字を織り交ぜた文章は、少なくとも書いている本人であるわたしにとって、最も自然なニホン語なのだ。」

この「ママ語」も温さんの文章作成も、metrolingualism (Pennycook & Otsuji, 2015)の観点から見れば、至極自然な言語使用であるといえる。また、温さんは、ことば自体の捉え方について、次のようにいう。

「そもそも、中国語と台湾語と日本語と、ひとつずつ数える必要はないのかもしれない。三つの母語がある、というより、ひとつの母語の中に三つの言語が響き合っている、としたほうが、自分の言語的現実をびたりと言い表わせるのではないか。考えてみればわたしは、中国語や台湾語を外国語として、というよりは、自分のニホンゴの一部のように感じている。わたしはもう、母たちの声を「和訳」しない。むしろ、記憶に向かって耳を凝らし、日本語として発せられたのではない音をたぐりよせる。」

これは、人の中にある多様な言語能力が「複雑で不均質だとしても全体としてひとつのもの」と捉えられる複言語複文化能力（コスト他、2011）であり、その言語使用は常に動的であり、その実態は translanguaging (García & Li Wei, 2014) の考え方で捉えることができる。

第四は、自分の使用することばに歴史性を感じる点である。温さんは自分の使用する中国語について、次のようにいう。

「中国人には「南っぼいね」とからかわれ、台湾人には「日本人っぼいよ」と笑われ、中国語が堪能な日本人には「でたらめだなあ」と苦笑される自分の中国語を、わたしはとても自慢に思っている。なぜならわたしの中国語には、台湾で生まれて日本で育った自分の時間が刻まれていると思うから。わたしに限ったことではないだろう。言葉とは、もともとそういうものなのだ。」

台湾・馬祖で開催された日本・台湾・タイの三ヵ国合同映像ワークショップで小説家として日本語と中国語を織り交ぜてスピーチをしたとき、温さんは思う。

「これがわたしのコトバだ。いや、このコトバがわたしなのだ。台湾人なのに中国語ができない。日本語しかできないのに日本人ではない。ずっと、それをどこかで恥じていた。けれども、そうであるからこそ、わたしはわたしのコトバと出会うことができた。」

このように、人のことばにはその人やその家族の歴史が刻まれているのである。

第五は、このような複言語複文化能力が人の生き方に影響していくという点である。温さんの場合は、小説を書くことを生業としていく。「わたしは、日本語を書く新しい台湾人だ。」と思うと同時に、「台湾人でありながら日本人でいたい。」（下線部は、本書では傍点）と思う。そして、温さんは自分の記憶から生まれる物語を、「わたしの回想の仕方次第で、それは異なる物語になり得ることを示すかのように」感じ、小説を書くという方法にゆだねていく。だからこそ、「わたしは小説を書いていたというよりは、自分が経験したことを、自分ではないだれかに生き直してもらうために、小説という形式を借りていた気もする。」

「わたしは、日本語を書く新しい台湾人だ。」と思うからこそ、「文学が証明し

ようのない複数の真実に光を照らすものである限り、わたしもまた文学なしではいられない。」と小説家としての思いを綴る。

温又柔著『台湾生まれ 日本語育ち』(2015)は、まさに言語間、空間、言語教育カテゴリー間を移動した子どもの記憶とその生き方についての自己エスノグラフィックな「学術的研究書」なのである。

## 2. 温又柔の小説世界：『来福の家』

温又柔さんの小説の中にも、前述の移動の記憶が色濃く反映している。『来福の家』(白水社、Uブックス)は、2011年に集英社から刊行された同名の書籍を、2016年に白水社が新書版として復刊した温さんの小説集である。

『来福の家』には2作品が収録されている。その一つが「好去好来歌」(こうきょこうらいか)。この作品は温さんの文学界デビュー作品で2009年の第33回すばる文学賞佳作を受賞した作品だ。本書に収録されているもう一つ小説が「来福の家」である。この小説のタイトルが本書の書名にもなっているように、この作品も、温さんにとって重要な作品といえよう。実際、「あとがき」で「本書に収められた二つの小説は、私の原点であり源泉です。」と温さんは明言している。

私は文学評論家ではないので、この作品の文学的価値を論じることはできない。ここで私が論じたいのは、むしろ、エッセイ集『台湾生まれ 日本語育ち』と同様に、本書のもつ、学術的意味である。以下、二つの作品で描かれている登場人物の心情や出来事を、幼少期より複数言語環境で成長する子どもの視点から見てみよう。なお、以下のかっこつきの引用はすべて本書からである。掲載ページ数は省略する。

### 2.1 「好去好来歌」

この作品は、「中華民国」のパスポートを持つ台湾人の両親から生まれた縁珠(えんじゅ)という名の18歳の女子学生を主人公とする。縁珠は台湾で生まれ、幼少期に東京へ移住した設定になっている。

物語は、縁珠と縁珠の母、縁珠の彼氏の麦生(むぎお)を中心に展開するが、物語の場面やエピソードには、幼少期に複数言語環境で成長した著者の経験が随所に反映しているように見える。たとえば、縁珠が両親と行った東京の入国管理局の様子、縁珠が高校生の時に大学で開かれた中国語の授業に参加した時の風景、縁珠が中学生の時に英語の授業で名前の英語表記がパスポートの英語表記と異なることに気づいたシーン、幼少期に海外で過ごしたクラスメイトからパスポート

を見せてもらった時に縁珠が動悸を覚えたシーン、中国語を学ぶ麦生が縁珠の家で餃子を食べるシーン、縁珠の母が縁珠の結婚について述べるシーンなど、どれもが日本語、中国語、台湾語、またその発音や文字、日本人、中国人、台湾人などの既成の枠組みに揺れる、主人公の縁珠の心情がリアリティをもって表現されている。日本語と中国語と台湾語がひしめき合う母の言葉の奥底にある思いに気づき、縁珠がいう「わたしと大事な話がしたいのなら、ちゃんと日本語で話してよ。」と言う台詞や、麦生が習いたての中国語で縁珠の母に話しかける時に、縁珠が「日本人のくせに、どうして中国語を喋るの？」（下線部は、本書では傍点）と言い放つ台詞、麦生の本名について「（タナカダイスケ！）なんという平凡な日本語なのだろう、と思った。」（下線部は、本書では傍点）という縁珠の言葉などは、その例であろう。

さらに、この物語に台湾に住む曾祖父母、祖父母や台湾の風習が家族の歴史を語るように綴られている。日本の植民地時代を経験した祖父母の日本語や、縁珠が小学生の頃だんだん日本語しか話さなくなった時「さあ、今から「中国語」を話そうか？」と中国語を維持しようとした縁珠の父の言葉など、ことばに関連する描写も多い。

温さんは、「わたしは小説を書いていたというよりは、自分が経験したことを、自分ではないだれかに生き直してもらうために、小説という形式を借りていた気もする。」（『台湾生まれ 日本語育ち』、2015）と述べたように、自分の経験と向き合いながら、小説を紡ぎ出しているということである。そうであれば、この作品にも、温さんの経験が色濃く映し出されていると解釈できよう。

## 2.2 「来福の家」

この作品は、台湾人の両親のもと日本で生まれた許笑笑（キョ・ショウショウ）という22歳の女性が主人公である。大学を卒業してから、中国語専門学校に入るところから物語が始まる。この物語も、随所に、著者の経験をもとにしたと思われるエピソードが挿入されている。

たとえば、主人公が幼稚園の頃、砂場で日本人の友だちに「実は、あたしにはもうひとつの名前があるのよ」と中国語名を打ち明ける。その頃、笑笑は家族から「えむ」から「エミ」と呼ばれていた。ただ、このエピソードに、中国語名のカタカナ表記音について「シュエイ・シャオシャオ、あるいはスウイ・シアオシアオ」がよいのだろうかかと迷いを書く。また、笑笑の6歳上の姉、歓歓（カンカン）は大学で中国語学科を卒業して、日本語教師養成学校に通っているが、その姉の名前についても、「シュエイ・ファンファン、それともスウイ・ファンファン」と

いう表記の話が絡む。

また、中国語のできる姉が日本語教師として、中国から来日して間もない莉莉(りり)ちゃんという小学校5年生の女の子に日本語を教えに行くエピソードもある。「許先生が来ると、莉莉の表情が明るくなるんです。」「莉莉は、ふだん、ことばがわからない中、必死にがんばっているんです。だから許先生も、日本語を教える、というよりは、中国語でたくさん莉莉の話聞いてあげてください。それが、莉莉にとって次もがんばろうって力になるんですから……。」と担任の声を載せている。ここにも、「移動せざるをえなかった」子どもの心情とそれを支える大人のやりとりが示されている。

他には、入学に必要な書類として住民票を取るのか外国人登録証明書が必要なのか、中国の中国語と台湾の中国語の発音や漢字の違い、中国や台湾では婚姻による改姓は義務付けられていないことと日本では婚姻によって片方の姓に改める義務があることなどがエピソードとして挿入され、物語は展開していく。

これらのエピソードも、『台湾生まれ 日本語育ち』(温、2015)を合わせて読むと、温さんの経験と結びついていることが窺われる。

### 2.3 考察：温又柔が描く意味世界

この二つの作品の文学的な価値やストーリー性をここで論じることはしない。むしろ、私が注目するのは、温さんが作品の中で構築する、「自分が経験したことを、自分ではないだれかに生き直してもらおう」意味世界である。その世界というのは、温さんが『台湾生まれ 日本語育ち』(温、2015)で、「文学が証明しようのない複数の真実に光を照らすものである限り、わたしもまた文学なしではいられない。」と述べるように、「証明しようのない複数の真実」の世界なのである。なぜ「証明しようのない」のかと言えば、この「世界」は、これまでアカデミズムにおいても議論されてこなかった世界だからである。

その世界は、「好去好来歌」の縁珠が自分の日本語、台湾語、中国語について、また日本人、台湾人、中国人について思う意識の世界であり、「来福の家」の笑笑が「わたしにとっての中国語は文字のないことばだった。響きそのもの、といってもよかった。」と語り、姉の歎歎が、「日本語は、歎歎にとっては母国語のようなものですから」と語る感情の世界である。その世界は、「チョコレートと巧克力」「牛乳と牛奶」というように、日本語と中国語の音から「どちらが美味しそうと思うか」という感覚的な世界でもある。そして、「来福の家」の最後に、「わたしたちからみたら、自分はたまたま台湾人であるというだけで、それは、日本人が偶然日本人であるのと変わらないのだ」と述べ、同時に、「かんかん、も、

しょうしょう、も、すごく素敵なお響きなんだもの。そういった姉の瞳がしっとり潤んでいた。そうね、わたしはいう。ほんとうにそうよ、おねえちゃん、かんかん、も、しょうしょう、も最高の名前よ。」と述べる、この感情の奥底、情念とも呼べる世界なのである。

温さんは、この二つの作品について「あとがき」で次のように述べている。

「言葉を知らなかった頃の記憶を出発点に、小説を書いてみたい。赤ん坊だった自分の周囲にあふれる音のざわめき、大人たちが交わしあう声のリズムと抑揚。言語を言語と認識する以前の、ありとあらゆる言語が私の「母国語」となり得る可能性を持っていた幸福な無文字時代の記憶を書くところから、小説を始めたい・・・」

幼少期から複数言語環境で成長する子どもたちにとって、ことばをめぐる自らの経験と記憶から生まれる「感情」「感覚」「情念」の世界でどのように生きていくか。それが、小説の主題となることを、温さんはこれらの作品で示したといえよう。同時に、私が思うのは、「移動する子ども」という記憶（川上編、2013）による世界は、本書の描く「感情」「感覚」「情念」の世界であり、その中で「移動する子ども」という記憶と自らの生にどう向き合っていくのかという課題は、アカデミズムの重要な研究テーマであるという点である。

幼少期より複数言語環境で成長する子どもにとって重要な課題は、語彙や作文力の量的調査ではわからない世界にあるということである。バイリンガルの子どものいかに作るかということだけを目指するような研究は、本書の縁珠や笑笑、歓歡の前ではなんら意味をなさない。本書は、まさに、21世紀に必要な「移動する子ども」をめぐる学術的「研究成果」として高く評価できる作品である。

### 3. 「移動する子ども」という記憶

幼少期より複数言語環境に暮らす子どもは、自分の外部の環境にある言語状況や言語景観、生態学的な環境と、自分の中にある複言語複文化能力と常に結びつけながらコミュニケーションをとる体験をしている。場面や相手に応じた複数言語によるやりとりは、時には他者とつながり、時には他者とつながらない体験である。つまり、他者との接触体験には子どもの持つ複言語複文化能力が深く関わっており、その能力によってコミュニケーションが成功したり不成功に終わったりするのである。あるいは、異なる背景を持つ他者との接触体験により、子どもの複言語複文化能力が鍛えられると言ってもよい。いずれにせよ、子どもにとって複数言語に関わる体験はときに楽しい体験であり、ときに苦しいつらい体験にも

なる。さらに、複数言語を使用して他者とつながったり、つながらなかった体験には、他者からのまなざしが常にともなうゆえに、その体験は、自らが他者をまなざし、そして自己を振り返る機会にもなる。そのような機会を日常的に繰り返しながら、子どもは成長していく点に、私たちは十分に留意する必要がある。

なぜなら、このような複数言語使用による体験は、自己アイデンティティの形成に影響を与えるからである。ここでいうアイデンティティとは、「自分が思うことと他者が思うことによって形成される意識」（川上編、2010）のことである。

「複数言語を使用して他者とつながったり、つながらなかった体験」を自分の中で意味づけ、そして自分の人生の経験として位置づけていくということは必ずしも容易なことではない。生活の中の出来事によって、幼少期の固定化された記憶が思い出され、その記憶によって不安が生まれ、その記憶の意味を再度振り返ることによって再固定化されるという記憶のメカニズム（井ノ口、2013）を踏まえると、幼少期の記憶を振り返るという作業は、ときに苦しく、不安をともなう作業でもある。当然、楽しい体験が思い出され、ポジティブに捉えられることもあるだろうが、いずれも、自己の生きざまと向き合う作業を通じて、自己のアイデンティティのありかを探さなければならない。

幼少期より複数言語環境で成長するという記憶がなぜ不安を生み出すかといえは、その理由のひとつは、社会が持つ規範性に照らして、自らの位置づけが不安定になる場合があるからである。前述の温さんのケースはその一例である。

また、日本人の両親を持つ子どもが海外で成長し、大学生となってから日本の大学に通う場合、外見は日本人に見えるのに日本語に「外国人訛り」があるとか、漢字が書けないことなどから、周りから「日本人なのに、どうして？」と訝しく見られたりすることがある。このとき、その大学生は自分が日本人なのかと思い悩んだり、日本に居場所がないと感じたりする。同様に、国際結婚した両親のもと日本で育った子どもが大人になってから親の祖国に行ったとき、その国の言語が十分に使用できず自分の言語能力に不安を感じたりすることがある（詳しくは、川上編、2010）。

このような体験と向き合い、自分自身の生き方を模索するとき、常に直面するのが、ひとつの国民国家はひとつの言語文化で成立しているといった社会的な規範意識である。それは他者が持つ規範意識であり、同時に自己が持つ（持ちたい）規範意識でもある。まさに、「想像の規範性」の影響下にあって、自己のアイデンティティを形成しようと働くのである。

社会学者の塩原良和はキャンベラの日本人エスニックスクールの実践を踏まえた研究（塩原、2003）の中で、エスニックスクールで教えられる日本文化の「エッ

センシャルな記憶」がオーストラリアで生きる子どもの将来の「ハイブリッドな記憶」となっていくという見通しを示し、多文化主義の再定義を提起した。それを踏まえれば、「エッセンシャルな記憶」が子どもに与える影響、その記憶が子どもにとっての「ハイブリッドな記憶」となり「ハイブリッド性の再生産」となるメカニズムを、塩原がいうように、慎重に検討する必要があるだろう。

塩原の研究で優れている点は、海外の日本人エスニックスクールで学ぶ子どもの「エッセンシャルな記憶」「ハイブリッドな記憶」という記憶に注目した点である。ただし、日本人エスニックスクールで「エッセンシャルな記憶」を再生産するのは「日本人の大人たち」であり、その大人たちが持つ本質主義的な「エッセンシャルな記憶」が子どもに教えられたとした着眼点に研究範囲の限界がある。つまり、前述の移動とことばと記憶の関係の視点が欠如しているからだ。

## おわりに：「移動する子ども」学の射程

ここで、改めて、「移動する子ども」という記憶について考えてみよう。

幼少期より複数言語環境で成長する子どもにとっての移動は、「言語間の移動」「空間の移動」「言語教育カテゴリー間の移動」を含み、その中で、複言語複文化能力による、動態的、相互作用的、複合的な、他者との交流体験が子どもにとって「意味のある経験」として「記憶」に残っていく（川上編、2013）。ここでは、このような幼少期より複数言語環境で成長した人にとっての「意味のある経験」、そして「記憶」を「移動する子ども」と呼ぶ。

このような意味の「移動する子ども」という経験は、けっして成長期だけに見られる現象ではない。子どもが大人となって社会で活躍していく過程でも、複数言語を使用する場面に遭遇したり、自分と同様の経験を持つ人と出会ったりする中で、幼少期から体験してきた複数言語に関わる記憶が呼び戻され、それらの記憶が新たな「経験」として意味づけられたりするからである。前述の温さんの事例はその一例である。人が幼少期からの記憶を大人になってから新たな記憶として読み替え、再固定化をすることが継続するのである。

つまり、「移動する子ども」という経験は、「移動する子ども」という記憶として、その人の中に蓄積されていくことになり、人のアイデンティティを形成し、再構築していくことにつながるのである。

ただし、その記憶が固定的なものかと言えば、そうではない。たとえば、グローバルな社会現象や国際関係の変化、観光やメディア、国際犯罪等によって、言語に対する社会的な評価や、その言語を使用する人々や国に対するイメージが変化

したりすることがある。たとえば、温さんの例で言えば、日本と台湾の関係や、台湾と中国の関係、震災の際の台湾からの支援などによっても、複言語複文化的体験は新たな意味へ変化していくだろう。

さらに、そのような人が壮年期、老齢期を過ぎていくうちに、生活や仕事のうでで複数言語使用の頻度や、使用言語と不使用言語のバランスが変化していくこともある。出生地の地域や国を離れ、出生地とは異なる地域や国で老齢期を迎えることは決して珍しいことではない。そのようなライフコースの中で、「移動する子ども」という経験の意味づけも変化し、新たな「移動する子ども」という記憶となり、人のアイデンティティや生き方に影響し続けていくのである。

では、このような「移動する子ども」という記憶は人のアイデンティティや人生において、また現代社会において、どのような意味があるのか。近年のグローバルな移動の現代に、このような意味の「移動する子ども」という経験そして記憶を持つ人々が急増している。つまり、誰もが「移動する子ども」となる21世紀の人の研究は、「人種」「民族」「国籍」「エスニシティ」「言語」などの20世紀の概念では捉えきれない新たなステージへ向かっているのである。それゆえ、「移動する子ども」は、21世紀の人の研究における、主観的意味世界を探究する新しい研究領域を開拓する分析概念となりうるのである。

その意味で、「移動する子ども」という記憶の研究とその実践研究である「移動する子ども」学は、継承語教育の枠を超えて、移動する時代の人の生のあり様を考える重要な、そして広い研究領域を提案するものである。この研究は、21世紀の海外においても、日本においても、必要かつ必然の研究領域であり、そのことを通じて、世界各地の複数言語環境で学ぶ子どもたちとその親、支援者と連携していく可能性が生まれるのである。

## 【参考文献】

- 井ノ口馨 (2013) 『記憶をコントロールする - 分子脳科学の挑戦』 岩波書店。
- 大山泰宏 (2015) 『人格心理学』 放送大学教育振興会。
- 尾辻恵美 (2016) 「メトロリンガリズムとアイデンティティ - 複数同時活動と場のレパトリ - の視点から」 『ことばと社会』 18号、11-34. 三元社。
- 温又柔 (2011) 『来福の家』 集英社。
- 温又柔 (2015) 『台湾生まれ 日本語育ち』 白水社。
- 川上郁雄 (2011) 『「移動する子どもたち」のことばの教育学』 くろしお出版。
- 川上郁雄 (2014) 「ことばとアイデンティティ - 複数言語環境で成長する子どもたちの生を考える」 宮崎幸江 (編) 『日本に住む多文化の子どもと教育 - ことばと文化のはざまで生きる一』 117-144. 上智大学出版。

- 川上郁雄 (2017) 「『移動する子ども』をめぐる研究主題とは何かー複数言語環境で成長する子どもと親の記憶と語りからー」『ジャーナル「移動する子どもたち」ーことばの教育を創発する』 8, 1-19.
- 川上郁雄 (編) (2010) 『私も「移動する子ども」だったー異なる言語の間で育った子どもたちのライフストーリー』 くろしお出版.
- 川上郁雄 (編) (2013) 『『移動する子ども』という記憶とカーことばとアイデンティティ』 くろしお出版.
- コスト, D.・ムーア, D.・ザラト, G (2011) 「複言語複文化能力とは何か」(原文は1997年、 姫田麻利子訳、『大東文化大学紀要〈人文科学編〉』第49号、pp. 249-268)
- 塩原良和 (2003) 「エッセンシャルな「記憶」／ハイブリッドな「記憶」ーキャンベラの日本人エスニック・スクールを事例にー」『オーストラリア研究』第15号、118-131.
- 三宅和子 (2016) 「社会言語学の新潮流ー‘Superdiversity’が意味するもの」『早稲田日本語教育学』20. 99-104.
- García, O. & Li Wei (2014) *Translanguaging: Language, Bilingualism and Education*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Pennycook, A. & Otsuji, E. (2015) *Metrolingualism: Language in the City*. Oxon: Routledge.